公　表

第34回 日本動物児童文学賞の受賞者及び入賞作品

第34回 日本動物児童文学賞には，96作品の応募があり，児童文学関係学識経験者による第一次審査を経て，動物福祉・愛護関係学識経験者や関係省庁関係者等からなる第二次審査委員会を8月8日に開催し，下記のとおり入賞作品として，大賞1作品，優秀賞2作品，奨励賞5作品が選定された．なお，例年は受賞作品の表彰を動物愛護週間中央行事の屋内行事にて行っていたが，本年も，昨年に引き続き，新型コロナウイルス感染症のまん延防止のため表彰式は行われず，作者及び作品の紹介のみとされた．

入　賞　作　品

【日本動物児童文学大賞】

「モモとタロウ」　**寺田喜平**（岡山県）

〈受賞理由〉 家業である牛飼いを通して，畜産動物と向き合う家族の心の動きとそれを通して成長する兄妹の成長の姿が描かれた作品．「牛飼い」という，いずれは食用となる命と真剣に向き合う姿が読者の心をつかみ，牛飼いについて，観念ではなく，実体験に基づいていると思わせるリアリティがある作品である．牛の飼育や子牛の誕生を通して命の大切さや動物の命をいただいて生きる人間について考えさせられ，畜産農家の大変さや食のありがたさを知るきっかけになり得る作品である．はじめのうちは牛飼いの仕事を嫌っていた兄妹が，牛飼いとしてのさまざまな出来事を通して，兄は祖父や父と同じ牛飼いに，妹は動物の命を大切にする獣医師になろうという決意に至る過程が自然に描かれ，人と動物の関係を子どもたちにもしっかり伝える作品である．

【日本動物児童文学優秀賞】

「堤防の道の散歩」　**竹内佐永子**（愛知県）

〈受賞理由〉 両親の離婚により引っ越したばかりで友達がいない小学四年生の少女が，唯一の気分転換である川の堤防の道の散歩をしていたある日，キジの夫婦を見つけて興味を持ち始めたことから鳥への興味が広がり，そのことがきっかけでクラスメイトと少しずつ仲良くなっていく．両親の離婚という複雑な家庭環境と，引っ越したばかりで周りに馴染めない主人公の心情の変化が鳥に対する関心や知識の高まりに絡めて自然に，かつ丁寧に描かれており，複雑な家庭環境で育つ主人公を通して，さまざまな環境の中で暮らしてゆく多様性を示すとともに，読み手である子どもたちに，鳥のさまざまな子育て，家族像を通して，自らを見つめる機会を与えるきっかけになり得る作品となっている．少女の気持ちを描くリアリズムと，話の間に挟まるキジの夫婦の擬人化が無理なく物語を成り立たせ，少女とキジによる交互の異なる目線からの描写が，物語をユニークに展開させている．自然保護の観点と，堤防の工事という防災対策の観点との兼ね合いの中で，動物との共生を考えるきっかけになり得る作品である．

「岬の野生馬」　**小俣麦穂**（長野県）

〈受賞理由〉 宮崎県南部の都井岬に生息する日本在来馬の一種である御崎馬．この野生馬を通じて，野生馬の特性や人間の管理の関わり方の難しさをリアルに描いている作品．生まれてすぐに死にそうになっている子ウマの「ナイ」を人間が手助けすることによって，その後のナイの野生馬としての生き方に大きな影響を与えてしまうという，実存する野生馬に着想を得て生み出されたドキュメンタリータッチの作品．大自然の中で営まれる野生馬の生態が生き生きと描かれており，野生馬の生態が良く理解できる作品である．また，野生馬に人間が関与していくことによる影響が，物語に深い奥行きを与えて，野生馬の管理の難しさが上手くまとめられており，野生馬と人間との関わり方を丁寧に描いた作品である．

【日本動物児童文学奨励賞】

「タレンとヨーサン二匹の猫のものがたり」　**尾崎順子**（兵庫県）

〈受賞理由〉 二匹の捨てられた猫が，一匹は野生の猫として逞しく，もう一匹は飼い猫として穏やかに，それぞれ境遇の異なる環境の中で成長し，それぞれの道をそれぞれが満足する生き方を選択しながら猫らしく生きていく姿を描いた作品．生い立ちの異なる二匹の猫が，それぞれに猫らしく生きることを選択する描写が，子どもたちの主体性や豊かな感性を育てる可能性を感じる作品．一方，物語の中には自然保護問題，野生鳥獣問題，捨て猫問題，認知症問題などが盛り込まれており，さまざまな社会問題について無理なく考えさせられる作品でもある．

「香菜子の決心」　**井上理博**（神奈川県）

〈受賞理由〉 譲渡会で出会った盲目の老犬を飼うまでの，過去の辛い経験からくる家族との葛藤を描きながら，動物福祉と愛護を背景に，犬の譲渡活動，終生飼養，命の大切さ，人と動物のふれあいという課題を通し，それらについて考えさせることを読みやすい文体でまとめられた作品．保護犬を迎える母と子の心情の描写が読み手の心を惹きつけ，老犬の認知症と人の認知症とを絡めて高齢犬を最後までしっかりと面倒をみることの大変さや大切さが丁寧に描かれており，犬を飼うことの意味を家族で追求していく展開が，読み応えを感じさせる作品である．

「手のひらの命」　**伊東葎花**（茨城県）

〈受賞理由〉 生き物が苦手な主人公が，とあるきっかけからハムスターを飼うことになり，ハムスターの飼育を通して家族が成長していく物語．ハムスターの特性がよく描かれており，ハムスターの飼育を適正に行う姿勢がしっかりと伝わり，動物との絆と命の大切さがよく表現されている．ハムスターの飼育を通して起こる事件を通して，複雑な家庭環境から生じていた家族関係が少しずつ改善され，小さな命を通して命の大切さを知ることによって家族が成長していく姿が描かれている心あたたまる作品である．

「おかえりナイア」　　堀部明美（奈良県）

〈受賞理由〉 能登半島に住む少年「かい」は，ある夏の日の朝，おじいちゃんと海岸を散歩しているときに子イルカを見つけ，命の危機を救う．数日の後，ぱったりとイルカを見なくなり，心配になって子イルカの夢を見る．翌年，大好きなおじいちゃんが他界し，悲しみに沈んでいるかいは，弱っている子犬を助けることで，限りある命の大切さを感じ，自分も元気になっていく．主人公が出会ったイルカ，飼い始めた犬，おじいちゃんとの別れを通して，命と生きることの意味をしっかりととらえていく姿が深く描かれている作品．野生動物と人間との関わり，野生動物保護と自然環境保全の大切さがよく描かれている作品である．

「金魚のあかちゃん」　　まきうちれいみ（東京都）

〈受賞理由〉 小学三年生の「まお」は，夏祭りで金魚すくいをし，金魚を飼うことになり，一生懸命金魚の世話をする．翌年，妹と行った夏まつりで，金魚の友達を作ってあげたいという思いから，再び金魚すくいをして新しい金魚を持ち帰るが，新しい金魚が病気を持っていたために，最初に飼っていた金魚が死んでしまう．金魚の飼育を通して，生き物を飼うことの責任をしっかり伝えようとする意図が感じられ，命について考えさせられる作品．金魚の適正な飼育の理解不足から生じた，「金魚を死なせてしまった」経験から，生き物を飼うことは楽しさもあるが，飼うときには，その生き物の特性をあらかじめ学習して適正に飼育することの大切さを教えてくれる作品である．

なお，入賞作品のうち大賞，優秀賞作品を収載した「第34回 日本動物児童文学賞受賞作品集」をご希望の方（1人1冊に限る）は，住所，氏名，電話番号，上記作品集希望と明記の上，切手310円分（送料）を同封し，下記送付先へお送りください．

〒107-0062
東京都港区南青山1-1-1　新青山ビル西館23階
公益社団法人 日本獣医師会 事務局
「第34回 日本動物児童文学賞受賞作品集」担当
お問合せ：TEL 03-3475-1601　FAX 03-3475-1604
E-mail : bungaku@nichiju.or.jp